

## 第一回 伝統はいかにして生き残ったか

謡本『閣龍（コロシヒヤス・攘夷）』 法政大学鴻山文庫蔵

幕末のペリー来航に取材した新作謡曲。「合衆同盟のよしみ」を結ぼうと日本を訪れた合衆国水軍提督太元帥「彼理」<sup>ペルリ</sup>（ワキ）が、天照大御神（シテ）の出現により逃げ帰るという内容。謡曲〈白楽天〉〈善界〉の詞章を部分的に用いる。曲名の「コロシヒヤス」はロンギの詞章中に「共に和するを以て国の名とす、これころんひやすの教へなり」とあるのに基づく。展示の二冊はいずれも幕末頃の写本で、うち一本には版本の奥付をもじった、嘉永六年（一八五三）、京都浦賀一條通鉄相場上ル（かねそらばあがる）、政川や逃兵衛板の奥書がある。

『触流し御能組』 法政大学鴻山文庫蔵

享保年間から幕末まで書き継がれた江戸幕府の公式演能記録。展示箇所は、文久二年（一八六二）二月の將軍家茂と和宮との婚礼祝賀能の番組。三日間にわたる催しで、観世清孝・宝生友于らがシテを勤めた。皇女和宮の降嫁をめぐる混乱は、公武融和をめざした幕閣の当初の目論見とは裏腹に、幕府の政治的地位を一層低下させることになった。江戸城での謡初はこの後、元治二年（慶応元年。一八六五）まで行われたが、公的な演能は文久二年が最後で、『触流し御能組』の記録も同年で終わっている。

『籍面苗字正誤願』 能楽研究所蔵

江戸幕府最後の金春大夫である金春広成が明治二十年、神田区役所に提出した改姓届。戸籍上は「今春」と記載されている姓を「金春」に改めたいと願っている。広成は維新後、本国の奈良に居を移すが、明治五年、壬申戸籍の編製が行われた際には、たまたま他国に出かけていたため、留守居の勝間為七郎（広成の弟子）が誤って「今春」と届けてしまった、とする。弟子が師匠の名を誤って届け出るといのはいささか考えがたく、壬申戸籍編製の逸話としてしばしば語られる、受付役人のミスの類か。江戸時代、「今春大夫」の表記が広く用いられていたために、間違つて「今春」と記載したものらしい。広成は明治十五年に上京。徐々に東京での活動を再開させる。

明治五年梅若宅能番組 能楽研究所蔵

明治五年十一月六日に梅若六郎（後の実）宅で行われた演能の番組。前月二十日のロシア国アレクセイ王子の饗応能が無事終了したことの祝賀と、その際、観世鉄之丞が拝領した石橋の牡丹作り物の御披露を兼ねた催し。坊城・田安・備前池田・細川・津軽などの華族も見物。饗応能に出演した宝生九郎・観世鉄之丞・梅若六郎がシテを勤め、鉄之丞は饗応能と同じく〈石橋〉を舞った。宝生九郎が梅若六郎宅の催しに出勤した最初の例であり、維新後衰退をきわめた明治の能楽は、二人の活躍によって大きく花開くことになる。

## 明治二年家元勸進能役割番組 法政大学鴻山文庫蔵

明治二年、高崎新町狂言座あらまちでの五日間の勸進能番組。各日の演目を扇型や円型の野線で囲み、配役を役者連名の段にまとめて記すなど、通常の番組とは異なる表記がなされている。冒頭に「家元 勸進能興行役割番組」とあるのが珍しい。演者は高崎藩のお抱え役者が主体らしいが、宝生座地謡方の梅若敬太郎ら宝生座の元座衆も含まれる。「家元 勸進能」と標榜するのはそのためか。高崎新町には明治二年、坂東座と呼ばれる常設芝居小屋が許されており、この勸進能も同所での催しらしい。芝居小屋での数少ない演能記録であるとともに、維新直後の元幕府お抱え役者の動向を伝える資料としても貴重。

## 能狂言等につき額田県・神奈川県布達 法政大学鴻山文庫蔵

明治五年八月に教部省が出した能狂言に関する布達を額田県・神奈川県が管内に触れたもの。能狂言以下の演劇において御上を冒流せぬこと、勸善懲悪を旨とし、淫風醜態に流れぬこと、演劇その他これに類する遊芸を渡世とするものは相応の行儀を慎むべきこと、の三か条から成る。額田県の布達には、能狂言の興行税についての一条が付加される。額田県は明治四年に岡崎県をはじめとする三河の十県と伊那県とが統合して出来た県で、明治五年十一月に愛知県に統合された。

## 今様能狂言番組二種 能楽研究所・法政大学鴻山文庫蔵

明治二十年代の今様能狂言の番組。幕末から明治にかけて、能に三味線音曲を用いた新種の折衷芸能が次々に登場したが、それらの中でも最も息の長い活動を見せたのが、林祐三郎（のち泉祐三郎）を座頭とする今様能狂言の一座である。同種の「吾妻能狂言」「能狂言天爾波熊格」とは異なり、女芸人を交えて、女性の美しさを前面に押し出した点が特徴で、明治二十年代には全国を巡業し、東京・歌舞伎座で三日間の慈善興業を打つほどの隆盛となった。展示した二種の番組は京都（下）と松山（上）での興行番組だが、後者の〈舟弁慶〉には「新発明大煙火入」の小書きが付いており、今様能狂言ならではの、ケレン味たっぷりの演出が窺われる。

## 第二回 能舞台に見る明治の能楽

### 明治十一年金剛舞台開き能番組 能楽研究所蔵

明治十一年九月、金剛唯一・泰一郎の親子が芝愛宕下に新築した能舞台の舞台開きの番組。金剛唯一は幕末最後の金剛大夫。維新の混乱期に多くの大夫が東京の舞台から遠ざかる中、麻布朝倉の舞台を拠点に息子の泰一郎とともに精力的な演能活動を展開し、明治の能楽復興の一翼を担った。その麻布舞台の老朽化を受けて芝愛宕下の舞台を新築するが、普請をめぐる訴訟のために、わずか二年後に神田小川町への舞台移築を余儀なくされ、その舞台も翌年、類焼に遭うという不運に見舞われた。

### 猿楽起源考 法政大学鴻山文庫蔵

日本古来の歌舞である猿楽の歴史を略述し、明治十一年、青山御所に能舞台が建てられ、外国からの賓客の饗応に供された例を挙げて、「自国ノ風俗舞楽」ヲ重んじることの重要性を説く。能楽社創立に際し世話人をつとめた久米邦武の著述「能楽の起源及変遷」と記述内容が重なり、久米の起草と見られる。岩倉具視の命により、明治十二年に久米邦武らが編纂したという「日本歌舞源流考」の下書か。能・狂言の衰退の現状を踏まえ、「貴人君子ノ深く注意スヘキ事ナラスヤ」と述べており、この呼びかけが明治十三年の皆楽社（能楽社の前身）の設立へとつながることになる。能楽社のメンバーの一人、黒田長知の旧蔵書。

### 能楽堂規則 法政大学鴻山文庫蔵

明治二十三年、「能楽社」は改組により「能楽堂」と改称され、さらに明治二十九年には井伊直憲・黒田長知らが中心となって新たに「能楽会」が設立された。本資料は、その設立に際し、芝能楽堂の使用規則を十二箇条にわたって記したもので、観覧料や観覧席の区画などを詳細に定めている。末尾に観覧席の等級（甲席・乙席・丙席）の区画を色別に示した「能楽堂観覧席等級区画図」の折り込み図が貼付され、当時の客席の様子を伝える貴重な資料となっている。

### 明治十四年芝能楽堂能番組 能楽研究所蔵

明治十四年五月十六日に芝能楽堂で行われた蜂須賀茂韶の主催による能の番組。芝能楽堂落成の年の催しで、芝能楽堂の現存番組としては最も古いものに属する。主催者の蜂須賀は能楽社社員の一人。明治十四年の舞台開きにも出演した宝生九郎と喜多文十郎がシテを勤めている。宝生九郎は梅若実とともに明治の能楽復興に多大な功績があった人物。喜多文十郎は喜多宗家の分家であったが、家元の千代造がまだ幼少であったため、家元代理として芝能楽堂にもしばしば出演した。

### 能楽社会計収支金計算簿 法政大学鴻山文庫蔵

明治十四年に設立された能楽社の会計簿。明治二十年から二十三年にかけての四年分を収める。「収入金」と「支出金」に分けて金の出入りを記し、奥に会計担当の黒田長知（旧福岡藩主）の署名がある。会計担当の前任者は藤堂高潔（旧津藩主）らしく、「収入金」の冒頭には明治二十年九月に「金八拾壹圓三錢九厘」を藤堂高潔から譲り受けるとある。能楽社の運営実態が窺える貴重な資料。

## 能楽堂記事 法政大学鴻山文庫蔵

明治二十七年六月から同年九月までの芝能楽堂の日誌。取締会議の議事や、能楽堂取締間で交わされた書状の写しなどを書き留める。掲出箇所は六月二十一日に芝能楽堂で行われたドイツ系アメリカ人のソプラノ歌手ミネ・ホーク（Minnie Hawk）の招請能に関する記事。この時演じられた〈邯鄲・紅葉狩・靉猿〉の配役と粗筋を英語で記した解説が添付されている。

## 明治能楽書翰 法政大学鴻山文庫蔵

九条道孝・前田齋泰ら旧公家・大名の書状十五通を張り込みにした巻物。一部、能楽とは関係のない書状も混じるが、能楽社の世話係の間で交わされた書状が大半を占める。展示箇所は能楽社発起人の池田茂政が井伊・前田に宛てた書状。五流謡名寄について、観世・金剛の二流からいまだ返答がないため、観世清廉・金剛鈴之助に催促するよう黒田長知と話し合ったこと、芝能楽堂修繕につき保険会社に呼び寄せ、林直庸へ返答する段取りであることを伝える。明治十五年の書状らしい。

### 第三回 大正期の能楽

#### 大正大典能写真 法政大学鴻山文庫蔵

大正天皇御大典祝賀能に際し撮影されたガラス板写真。御大典祝賀能は、大正四年十二月、京都御所での大正天皇即位の礼を受けて、東京の宮中豊明殿で行われた二日間の催しで、観世元滋以下、五流を代表する役者がシテを勤めた。初日は〈翁・高砂・石橋〉、二日目は〈橋弁慶・羽衣・狸々乱〉。スケジュール上の制約のため、三番の能が計一時間半に短縮して演じられたという。展示の写真は当日の演能を実際に撮影したのではなく、記録用に別に撮られたものらしい。当時の能楽界は大正天皇即位の祝賀ムードに沸き、各地で御大典祝賀の能が催された。

#### 宝生九郎翁八十賀記念品 法政大学鴻山文庫蔵

大正五年、宝生九郎が八十歳を迎えたのを祝って開かれた祝宴の記念品。築地の精養軒で催された祝賀会には、能楽会代表の蜂須賀茂韻や徳川家達ら三百人あまりが出席した。宝生九郎には記念品として九郎の面影を写した直径三尺の青銅レリーフ像が、参会の諸氏にはこれを縮製したものが贈られた。展示資料はその一つ。彫刻家・畑正吉の作。宝生九郎に贈呈されたレリーフ像の現物は大正大震災に焼失。その後、型をもとに復元されたが、戦時中の金属供出により再び失われた。宝生九郎が亡くなるのは、この八十賀の祝宴の四か月後のこと。そのさらに三ヶ月後には桜間伴馬も亡くなり、明治の三名人の時代は名実共に終焉を迎える。

#### 『能楽写真界』 大正六年五月号 法政大学鴻山文庫蔵

明治末年から大正・昭和初年にいたる四半世紀は、財界人による素人能、いわゆる「紳士能」が大きく花開いた時代でもあった。「紳士能」の語が初めて記録に登場するのは大正五年。その翌年四月七日・八日に大阪博物館で催された能は、「東西合同紳士能」と題し、東京から三井財閥の三井得右衛門を迎え、関西からは藤田財閥の藤田徳次郎、伊丹の酒造家・小西新右衛門らが出演して、〈安宅・船弁慶・熊野〉を競演した。『能楽写真界』は大阪のアマチュア写真家による能楽写真誌。大正五年五月の創刊で、関西の財界人による演能写真を数多く収める。

#### 『能楽画報』 大正十一年六月・七月号 能楽研究所蔵

大正期の能界を騒がせた話題に、女性の能楽への進出があった。なかでも、大正十一年五月七日、淡路由良町天川の政岡邸で女性のみによる「婦人能」が催されたのは、衝撃的な事件であった。主催は関西婦人能楽同好会。『能楽画報』はその舞台写真を多数掲載し、当時の人々が婦人能に大きな関心を抱いていた様子が窺える。同年、大阪の観世流・生一左兵衛が松竹から帝国劇場への出演を呼びかけられたことを契機として、能楽の劇場での上演も大きな話題となり、女性の能楽進出問題とともに、多くの論客がその是非をめぐって激しい論争を繰り広げた。

## 大正大震災見舞金内訳 法政大学鴻山文庫蔵

大正十二年九月一日に発生した関東大震災は東京の能楽界に大きな打撃を与えた。観世・宝生・梅若などの舞台が焼失。伝来の面・装束を失ったものも少なくなかった。しかし復興への動きは早く、震災後すぐに義捐金募集のための能の催しが各地で催された。展示資料は名古屋地方の宝生流れの有志が、住宅・舞台・装束の一切を失った宝生流宗家のために集めた見舞金の目録。二回にわたる見舞金の総額は九百七十五円に上った。宝生流研究会員の筆頭に挙がっている関戸守彦は江戸初期から続く名古屋の豪商。関戸本古今和歌集の所蔵者としても知られる。

## 東本願寺カリフォルニア別院奉納能写真 法政大学鴻山文庫蔵

大正期には、在外の日本人社会においても能が演じられていた。展示資料は大正十五年にカリフォルニアの東本願寺別院で行われた入仏式奉納能〈土蜘蛛〉の写真。シテは観世流の西山楽夫。観世・宝生入り混じりの上演で、囃子方・地謡方には女性の姿も見える。写真用にポーズをとつての撮影。いかにも外国での上演らしく、能面らしからぬ面を用いているのが興味深い。観世流の泉泰一郎が大正末年から昭和初年にかけてアメリカに滞在し、サンフランシスコで能を上演したといい、あるいはその泉の指導によるものか。実現はしなかったが、大正十一年にはカリフォルニア大学が日本から能役者を招聘し、三か月にわたる能の公演を行う計画もあり、彼の地においても能への関心が高まりつつあった様相を物語る。

## 第四回 メディアと能楽

### 『宝生』昭和三年四月号 能楽研究所蔵

昭和三年四月一日の宝生会能楽堂舞台開きを記念した特集号。大正の大震災による焼失後、同年になってようやく再建された宝生会能楽堂は、升席を全て椅子席に改め、能舞台と客席全体を鉄筋コンクリートの建物で覆うなど、あらゆる面で新時代に相応しい能楽堂であった。なかでも、東京中央放送局との協定により、舞台上部五カ所にマイクを設置し、地謡座後方の放送室から電話回線によるラジオ中継放送を可能にした点が特筆され、『宝生』掲載の平面図・写真にも「放送室」の存在が確認できる。日本でラジオ放送が始まった大正十四年の僅か三年後のことであり、この宝生会能楽堂の放送室から、様々な能の催しが電波に乗って各地に中継されることになる。

### 昭和七年～十二年宝生会番組 法政大学鴻山文庫蔵

ラジオ放送・能の大衆化を目的とした宝生会主催の番組。宝生会能楽堂では「斯道の大衆的進出」を謳った「ラヂオ放送の為」の催しがしばしば行われ、入場料（正面二円、側正面一円）も通常より低く設定された。中継放送は午後八時から実施。番組にもその旨が注記されており、能一番を中継するのが常であったようである。

### 新作謡曲「時宗」 関係資料 法政大学鴻山文庫蔵

昭和十五年に日本放送協会の委嘱により新作された謡曲「時宗」に関する諸資料。「時宗」は元寇に取材した作品で、後シテとして北条時宗が登場する複式夢幻能。作詞は俳人の高浜虚子。昭和十五年十一月十一日、紀元二千六百年祝典に合わせて中央放送局よりラジオ放送された。翌年十二月七日には麴町富士見町の細川家能舞台で能として初上演（シテは桜間金太郎）。その翌日に同曲の謡本出版に向けて、原作者・高浜清（虚子）、作曲者・桜間金太郎、謡本編著者・金春光太郎と出版者・江島伊兵衛との間で著作権申し合わせの調印が行われたが、その最中に太平洋戦争開戦を伝えるラジオ放送が流れ、参会の人々がラジオの周りに集まり耳をそばだてたという。

### SPレコード 法政大学鴻山文庫蔵

明治末年になると、レコードという新しいメディアが能の「音」を記録するようになる。欧米のレコード会社による出張録音の時代を経て、明治末年から昭和初年には日本蓄音機商会・日本ポリドル蓄音機商会などの国産レコード会社が次々に設立され、数多くの謡曲のレコードを制作した。展示資料は大正四年吹き込みの宝生九郎の〈羽衣・船弁慶〉、梅若万三郎の〈絃上・松虫〉、喜多六平太の〈橋弁慶・隅田川〉、宝生重英の〈鉢木・小督・田村〉。中には実際の謡本を添付しているものもあり、レコードが謡教授の面でも大きな役割を果たしていた状況を物語っている。

## 第五回 「満洲」における能楽

昭和十二年大連能楽殿祝賀記念能番組 法政大学鴻山文庫蔵

昭和十二年八月に大連市光明台大連能楽殿で行われた森川莊吉皆伝披露・還暦自祝記念能の番組。森川莊吉は大連能楽界の中心的人物であり、その還暦を記念して森川が自ら主催した催し。森川は初日に秘曲〈道成寺〉を舞っている。他に、宝生重英・大坪十喜雄・宝生新・川崎利吉・山本東次郎ら、錚々たるメンバーが東京から来演した。番組には演者紹介・曲目解説も掲載。裏表紙に「わんや書店寄贈」とあり、東京のわんや書店が番組の制作を請け負い、後に大連に送ったものらしい。表紙の鱗型文様は、この時、森川が〈道成寺〉を舞ったことに因んでいる。

台湾中壢街での演能写真 法政大学鴻山文庫蔵

日本統治下時代の台湾における演能写真。台北県内の中壢街（現桃園県中壢市）で行われた中雲会主催の奉祝能楽会。演目は〈竹生島〉。年代不明。台紙に「後シテ松村霞氏、ツレ佐名木婦人、ワキ藤沢国太郎氏」と配役が記されており、藤沢国太郎は台湾総督府中央研究所に勤務した同名人物と同人か。明治二十八年に下関条約により清国から割譲された台湾では、明治三十年代頃から、台北・台南などで盛んに謡曲や能が行われた。台北では喜多流・観世流・宝生流、台南では宝生流が活発で、明治四十二年には、京観世の流れを汲む田中基次が台湾に渡り、しばらく滞在して謡曲教授にあたってもいる。台北の台湾神社や臨濟寺内の豊川稻荷神社でも祭礼能が頻繁に行われたが、その具体的な実態については不明な点が多い。

昭和十六年哈爾濱宝生流能楽鑑賞会番組 法政大学鴻山文庫蔵

昭和十六年八月六日、哈爾濱高等女学校講堂仮舞台での宝生流能楽鑑賞会の番組。末尾に「主催 哈爾濱宝生会／哈爾濱鉄道局厚生会」とあり、満鉄関係者が主体となつての催しらしい。昭和十二年の大連での記念能と同じく、宝生重英・山本東次郎らの出演。一調山姥のシテは森川莊吉から野村論に変更した由の注記がある。野村は佐渡で医業を営んでいた萩野桂三の長男で、宝生嘉内の実家・野村家を再興した人物。後年、蘭作と名乗り、佐渡の能楽の興隆に大きな功績を果たしたことで知られる。能楽鑑賞会の翌日には、その野村論の実父である萩野桂三の追善能も行われ、案内状によれば、当日は宝生重英（野村論の義父にあたる）が〈隅田川〉、野村論が〈望月〉を勤め、能楽鑑賞会の入場者は漏れなく招待されたという。

上海宝生会秋季大会謡曲番組 法政大学鴻山文庫蔵

昭和十九年十一月九日、上海神社長生殿での上海宝生会主催による宝生会秋季大会の番組。冒頭に戦局の動向に続いて、長生殿竣工三周年にあたって「記念謡曲練成大会」を開催する旨を記す。シテは宮良孫康・田村小一郎・重松為治ほか。狂言は上野正文ほか。キリに祝言「海ゆかば」が付くのは、戦時統制下の催しの通例。会費不要、各自の丸弁当持参とある。中国大陸では、早く明治末年に漢口で謡会が催されたことが知られるが、具体的な資料はほとんど残されておらず、本番組は中国における謡会の数少ない資料として貴重。



## 『満鮮謡曲界』 法政大学鴻山文庫蔵

満洲・朝鮮の謡曲愛好者のための雑誌。昭和三年創刊。大連在住の有馬藤太（梅若流。新撰組の近藤勇を新政府軍に連行したことで知られる薩摩藩士・有馬藤太の息子）が編集人、朝子青州が発行人を務めた。大正七年から大正十五年まで刊行されていた『満鮮声楽界』の後続雑誌であるため、創刊号は改題第壹号と名付けられている。特定の流儀に偏らず、満鮮地方の謡曲に関する記事を幅広く収め、大連能楽堂移転の経緯、大槻十三・宝生重英・梅若六郎の満洲来演の様子などを具に伝えている。旧植民地下の演能活動を知る上で第一級の資料。昭和十年以後は発行人が泉泰知に変わるが、昭和十二年八月号には、大連の能界を支えた泉泰一郎（観世流）が満洲を離れて大阪に移住するのを機に、発行所も大阪市北区に移すとの告知が出されている。ただし、これ以降も刊行されたかは不明で、泉泰一郎の離満とともに廃刊となった可能性が高い。

## 『満洲梅若』 法政大学鴻山文庫蔵

昭和十一年に大連で創刊された在満梅若流友のための機関誌。『満鮮謡曲界』と同じく有馬藤太が編集人を務めた。毎月一回の発行で、昭和十八年二月の八十号までの刊行が確認できる。江戸・明治期の梅若家の歴史をまとめた「梅若流沿革史」など、満洲に直接関わらない一般的な記事が過半を占めるが、大連の梅若流謡曲の発展に大きな功績を果たした国政与三郎の「大連の梅若流沿革と私」、梅田富三郎の「渡満当時の思ひ出」のように、満洲の謡曲史に関する重要な証言も少なからず収められている。展示箇所は昭和十一年に梅若六郎一行が満洲に渡り、各地で演能したことを報じる記事で、大連能楽殿・新京記念公会堂・撫順公会堂での上演写真を掲載する。

## 第六回 能と軍国主義

### 唐相撲装束借用願 法政大学鴻山文庫蔵

日清戦争軍資義捐の勸進能に徳川義礼所蔵の〈唐相撲〉の装束借用を願い出る書状の下書き。徳川義礼は尾張徳川家の第十八代当主。この軍資義捐勸進能は明治二十七年十一月の三日間、芝公園能楽堂で行われ、〈唐相撲〉（唐角力）は三日目に野村与作によって演じられた。装束は西本願寺所蔵のものが用いられたというから、徳川家との借用交渉は結局上手くいかなかったらしい。〈唐相撲〉は日本人の相撲取りが中国人を次々に倒すという内容で、この場に相応しい演目。軍資義捐のための能はこの後、日露戦争・日中戦争の折にも盛んに行われた。

### 謡曲詞章改訂関係資料 法政大学鴻山文庫蔵

五流共同で取り決めた謡曲詞章改訂に関する書類。〈蟬丸・大原御幸〉の上演自粛を契機として、昭和十五年、天皇へり不敬と見られる詞章の改訂が検討された。展示資料はその改訂に際し、能楽師と識者による検討会議の議事録、改訂の草案など。他に、〈蟬丸〉の完全な廃曲を求める貴族院議員・金子元三郎の書状も合わせて展示する。金子は小樽での右翼団体による〈蟬丸〉上演中止運動に関係した人物で、この事件が謡曲詞章の全面的な見直しの大きな契機となった。

### 新作能『忠霊』関係資料 法政大学鴻山文庫蔵

昭和十六年に新作された戦時下の時局能〈忠霊〉の初演に関する資料。華族会館恩賜能舞台での「新曲能「忠霊」発表能組」（主催大日本忠霊顕彰会）、能会の案内状、〈忠霊〉の梗概、山口蓼洲画伯作「能楽『忠霊』之図」頒

布会の案内状から成る。番組によれば、同日の初演の際には、午後二時、四時半、七時半と三回にわたって〈忠霊〉が演じられ、橋岡久太郎、梅若万三郎、観世鍔之丞が交替でシテを勤めた。

## 『大東亜戦争小謡集』 法政大学鴻山文庫蔵

雑誌「宝生」で公募した時局物の小謡集。昭和十八年刊。大東亜戦争での日本軍の活躍を謡曲の替謡としたもの。「支那事変小謡集」の姉妹編。「海ゆかば」の小謡(宝生重英曲)を冒頭に、全二十九曲を収める。

## 昭和十八年宝生能楽堂別会番組 法政大学鴻山文庫蔵

昭和十八年の宝生能楽堂での能番組。一通は十月九日の松本謙三主催秋季別会、もう一通は十月二十四日の宝生会別会能。番組の裏に技芸証問題のため中止を余儀なくされ、「決戦非常措置」のために結局開催不能となったこと、梅若万三郎の那須疎開により当初の番組が変更となり、警戒警報のため再度延期されたことが記される。左の葉書は、昭和十八年十月十日の宝生会月並能延会、昭和二十年四月八日の月並能、二十二日の素謡会中止を伝えるもの。戦局が本格化する中で、番組の変更のほか、能会の延期・中止が頻繁に起こるようになる。

## 昭和二十年四月九阜会番組 法政大学鴻山文庫蔵

昭和二十年四月十五日開催の観世九阜会能番組の案内。四月五日付の口上に続けて、仕舞三番・狂言一番・能一番の番組を記す。狂言は野村万蔵の「酢薑」、能は観世喜之の「田村」、付祝言として「海ゆかば」。口上では交通不便と空襲のために来観者が減少しているが、今後も毎月の演能を継続する覚悟であると記す。末尾に「当日空襲警報発令サル、コトアルモ午前中ニ解除ノ場合解除後二時間ヲ待チテ演能可仕候」とあり、戦時下の緊迫した状況が窺える。九阜会能楽堂は一か月後の五月二十四日、空襲により焼失した。

## ワルサー記念平和基金能英文解説 法政大学鴻山文庫蔵

昭和二十五年十一月十八日にワルサー記念平和基金(詳細不明)の援助により催された能会の英文解説。進駐軍関係の催しらしい。能の概説に続いて、〈安宅〉〈羽衣〉〈小鍛冶〉の配役とあらずじ、狂言・仕舞・舞囃子の曲目を英語で記す。〈安宅〉のシテは梅若六郎、〈羽衣〉は Ayako Tateishi、〈小鍛冶〉は Maso Shirasu。Shirasu は作家の白洲正子であろう。随所にタイピングのミスが見られる。終戦後には、能楽に対する理解を求めするため、進駐軍を招待しての演能が度々行われた。

## GHQ各曲抵触箇所調べ 法政大学鴻山文庫蔵

能の題材・字句についてGHQの方針に抵触すると思われる事項を記載したものの。「安宅。撰待」の「封建的主従関係」、「善知鳥」の「鳥を殺すことの残虐性」、「加茂・金札」などの「神国思想」、「桜川・自然居士・隅田川」の「人買ヒ」や、「海士」の「池水に。身を投げて失せにけり」、「右近」の「君が代を守りの神と思ふべし」といった詞章が問題として挙がっている。GHQからの指示に基づき、主従関係や尊皇思想が顕著な作品、入水・自殺の場面が見られる作品につき、報告したものか。能楽の分野においてもGHQの検閲があったことを示す数少ない資料。